

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

『太平記』の表現と中国の類書：『韻府群玉』受容の可能性

著者	？ 力
出版者	法政大学大学院
雑誌名	大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
巻	81
ページ	162-155
発行年	2018-10-31
URL	http://doi.org/10.15002/00021348

『太平記』の表現と中国の類書

―『韻府群玉』受容の可能性―

はじめに

『太平記』には中国の故事成語が数多く引用されている。奈良時代から既に受容されていた『史記』所収のものはもちろん、新たな宋代の故事も見られる。これらの中国の故事成語の受容について、先行研究は『明文抄』『玉函秘抄』『管蠡抄』『世俗諺文』などの和製の類書からの深い影響を指摘したが¹、『太平記』にはこれらの類書に収められていない中国の故事成語が引用されている。だとすると、中国の類書から受容した可能性も考える必要がある。本稿では、『太平記』における中国の故事成語を取り上げて、その表現と受容の経路を考察することにした。

一、日本における類書の受容について

伊藤美重子氏は類書とは、既存の文献からの引用文からなること、その

人文科学研究科 日本文学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程三年 鄧力

引用文を何らかの類にわけて整理編集することの二つの要件を備える工具書であると指摘した²。類書には、中国で成立したものと日本の文人によって作られた和製類書が含まれている。日本の歴代の文人には類書の使用を重視する伝統がある。『日本国見在書目録』には『修文殿御覧』『藝文類聚』『初学記』など中国の類書の名が載せられている³。後に『藝文類聚』に範を仰いだ和製類書である『秘府略』が生み出された。それ以降、和製類書の編纂が絶えず、『菁華抄』『幼学指南鈔』『世俗諺文』も次々に完成した。さらに中世に入ると、『君子集』『玉函秘抄』『管蠡抄』『明文抄』などの新たな和製類書が誕生して、日本文学に大きな影響を与えた。村上美登志氏の考察によれば、『十訓抄』『徒然草』では漢詩文や故事成語の引用にあたって、『明文抄』を中心とした和製類書が参照された可能性が高いといえる⁴。村上氏の見方は遠藤光正氏の指摘とほぼ共通する。『徒然草』と同時代に成立した『太平記』でも、和製類書から引用した中国の故事成語・金言佳句が少なくない⁵。しかし、『太平記』ではこれまでの類書に収めら

れない宋代の故事が見える。だとすると、『太平記』作者は宋代以降に成立した類書を利用した可能性がある。芳賀幸四郎氏は中世の禅僧たちが中国の故事を引用し、修辭の技巧を弄した法語や疏を作る上で、百家全書家的な知識を必要とし、さらに大陸の詩文を鑑賞理解し自らが詩文を作る上でも、中国の辞書・韻書・類書などにたよる必要があったと指摘した。¹⁰『太平記』が成立する前後は、宋学が盛んになる時期であり、最新の文学情報を載せた宋代の類書を使うのは自然なことだと思われる。

宋代の類書といえば、宋末元初の陰時夫によって編纂された類書『韻府群玉』に言及しなければなるまい。住吉朋彦氏は同書について「十四世紀以降の漢語世界に非常な勢いで流行し、東アジアにおける学藝の展開に広範な影響を与えることとなった」と指摘している⁷。また、五山僧の義堂周信は『空華日用工夫略集』康熙三年（一三八一）十一月二日条に「同太清和赴二條准后之招（中略）和漢聯句、始用今大明撰洪武正韻群玉爲韻、遇第一東字」と記述している⁸。これは日本において『韻府群玉』の受容に関する最古の記録である。

この『韻府群玉』には五山版もある。川瀬一馬氏は五山版『韻府群玉』には大陸より来日した刻工名が附刻されていることから、南北朝半ば頃の開版だと判断した⁹。後に柳田征司氏は、五山僧は漢詩聯句を作ること尊重したため、韻別に漢字熟語を類別した『韻府群玉』は非常に便利な書物として利用されたと評価して、日本に現存する『韻府群玉』の版本を詳しく考察した¹⁰。また、住吉朋彦氏は以上の先行研究を踏まえて、文献学から改めて詳しく『韻府群玉』の版本を考察した¹¹。柳田氏と住吉氏の見方をまとめると、『韻府群玉』の現存諸版中、最古の刊本は元統二年（一三三四）に刊刻されたものとなる。また、日本で最も広く行われたのは元統二年刊本を底本にして刊刻された日本南北朝刊本である。『太平記』が『韻

府群玉』から影響を受けたか否かについては、まだ検討の余地がある。しかし、元版の流入状況を考えると、『太平記』作者が『韻府群玉』に触れた可能性も否定できないように思われる。以下はそれを前提に『太平記』と『韻府群玉』の関係を考察したい。

二、『太平記』における宋代の故事と『韻府群玉』

『太平記』における中国の故事成語には、巻四「呉越合戦」のように詳細に描写したものがあ一方で、故事を簡略化したり、熟語のように引用したりする例も見られる。例えば、『太平記』巻四「呉越軍事」に引用された「窮鼠却嚙猫、鬪雀不恐人」という中国のことわざについて、遠藤光正氏は和製類書『玉函秘抄』の上巻にみえる「窮鼠齧狸、戦雀不畏人」をその典拠と見るべきだと指摘した¹²。しかし、『太平記』にはこれらの和製類書には見られない中国故事成語も引用されている。

『太平記』における宋代の故事を取り上げて考察しよう。まず巻二十六「従伊勢国進宝剣事」に見える「画工鬪牛之尾ヲ誤テ、牧童ニ笑レタル事」という故事を取り上げて、その受容の経路を検討しよう。

大納言、兼員ニ向テ宣ヒケルハ、聊三種神器之事、家々ニ相傳シ来ル義、マチノナレ共、資明ハ未タ是ヲ信セス、画工鬪牛之尾ヲ誤テ、牧童ニ笑レタル事ナレハ、御邊之申サレンスル義ヲ以テ、正路トハ可存ニテ候、聊事ノ次ヲ以テ、此事存知シタキ事アリ、委ク宣説候ヘトソ仰ケル¹³、

太神宮へ千日参詣の志を立てた下野阿闍梨円成は、満願の夜に三鈷柄の

劍を海岸で拾い、それを日野資明に献上した。この劍は元暦の代に海底に失われた宝劍だという神託の真偽について、資明が平野社の神主である神祇大副兼員に問い合わせる場面である。資明は三種の神器の諸説には信をおきがたく、世間に笑われることを避けるため、兼員の説を正説としたいと述べた。ここではそのことを画工が牛の尾の方向を誤って描き、牧童に笑わたといい故事を引用して説明している。この故事の典拠について、『太平記鈔』は『萬花谷』第三十三巻の記載「有藏戴崧牛鬪與客觀、旁有一牧童曰、牛鬪力在前、尾入兩股間、今尾掉何也、出仇池筆記」を取り上げて、『仇池筆記』にこの故事が見えるとした¹⁴。この『仇池筆記』は様々な逸話を集めた宋代の筆記で、作者は蘇軾だといわれているが、『四庫全書總目』は「好事者集其雜貼為之、未必出軾之手著」と述べている¹⁵。また、この書がいつ刊刻されたのかはわからず、現存するのは明の萬曆年間に趙開美が刊行した版本である¹⁶。さらに、この書が日本の南北朝時代に受容された記録も残らず、『太平記』の先行研究では触れられることはなかった。だとすると、『太平記』作者がこの書を直接利用した可能性は低いと思われる。

一方、日本古典文学大系『太平記』の頭注は蘇軾の「書戴嵩画牛」に見える故事であると指摘し¹⁷、新編日本古典文学全集の頭注¹⁸も同様の文献をあげている。一方、増田氏は「蘇東坡の文に発してすでに成語化していたものかと疑われる」と指摘した¹⁹。日本古典文学大系と新編日本古典文学全集の注釈は蘇軾の「書戴嵩画牛」の名をあげたが、この故事は蘇軾のどの文集に収められたかという点には言及していない。実は、この故事は宋代の筆記『東坡志林』に見られる逸話である。『東坡志林』とは、宋人の筆記の代表作と目され、蘇軾の史論・隨筆・雜談などを集めたものである。『四庫全書』はこの作品を「子部・雜家類・雜說之属」に定位した。では、その中の「書戴嵩画牛」という記事を確認しよう。

蜀中有杜處士、好書畫、所寶以百數、有戴嵩牛一軸、尤所愛、錦囊玉軸、一日曝書畫、有一牧童見之、拊掌大笑曰、此畫鬪牛也、牛鬪力在角、尾搐入兩股間、今乃掉尾而鬪、謬矣、處士笑而然之、古語云、耕當問奴、織當問婢、不可改也²⁰、

蜀中に杜處士有り、書畫を好む、寶とする所以つて百數、戴嵩の牛の一軸有り、尤も愛する所なり、錦囊玉軸、一日書畫を曝す、一牧童之を見る有り、掌を拊ち大笑して曰く、此の畫鬪牛なり、牛の鬪ふとき力角に在り、尾兩股の間に搐き入る、今乃ち尾を掉ひて鬪ふ、謬りか、處士笑ひて之を然りとす、古語に云く、耕すには當に奴に問ふべし、織るには當に婢に問ふべし、改むべからず、

右の内容が、『太平記』の「画工鬪牛之尾ヲ誤テ、牧童ニ笑レタル事」という表現の原拠だと考えて間違いない。それならば、『太平記』作者が『東坡志林』を利用した可能性があるか否かが問題になる。『東坡志林』の成立と版本について、周先慎氏は『東坡志林』には一卷本、五卷本、十二巻本と異なる伝本が存在し、流布本にあたるのは明の萬曆年間に趙開美が刊行した五巻本で、商濬が編集した十二巻本も同じ時期に完成したと指摘した²¹。注意を払うべきところは、五巻本と十二巻本の成立は『太平記』の完成した後のことなので、『太平記』作者が触れることはできない点である。また、南宋に刊行された『百川学海』に一卷本の『東坡志林』が収録されたが、この一卷本には蘇軾の十三篇の史論しか収められていない²²。『太平記』に引用された「書戴嵩画牛」は筆記であるので、『百川学海』に収録されていないのである。一方、『四庫全書簡明目錄』に載せられた陳振孫「直齋書錄解題」「東坡別集」の条には「坡之曾孫給事嶠季真刊家集于建安、大

略与杭本同、盖杭本当坡公無恙時已行于世矣、麻沙書坊又有大全集、兼載志林雜說之類」²³という記述がある。この記述によれば、蘇軾の生前に杭本の東坡別集が既に刊行されたが、この杭本には「志林雜說」などの内容は載せられていなかった。「志林雜說」の内容は後の麻沙本『大全集』に入っていた。麻沙本とは、宋代に福建省建陽県西麻沙鎮書坊によって刊刻された本である。五卷本の『東坡志林』について、『四庫全書簡明目錄』には「舊本題宋蘇軾撰、一名東坡手澤、後編入東坡大全集中改題此名」という記載がある²⁴。つまり『大全集』は『東坡志林』の前身だと考えられる。要するに、南宋の時に雑談・筆記を収めた東坡の別集が既に存在していたことがわかるのである。

ところで、『東坡大全集』も『仇池筆記』も『東坡志林』も、南北朝の日本に伝入された記録が見えない。「普門院經論章疏語錄儒書等目錄」には「注坡詞二冊、東坡長短句一冊」という記録が見られるが、蘇軾の別集の名は見られない。また、道元の『正法眼藏』、中巖圓月「空華集序」に蘇軾の詩文が引用されているが、その史論・雑談などの受容は見られない。さらに、五山僧の読書圈をめぐって、芳賀氏は宋の陸游の『老学庵筆記』、王応麟の『困学記聞』、洪邁の『容齋隨筆』、趙興時の『賓退錄』、苑正敏の『遜齋閑覽』、羅大経の『鶴林玉露』、明の都穆の『聽雨紀談』などの随筆・雑記がよく読まれていたと指摘したが²⁵、『東坡志林』は言及されていない。『東坡志林』は南北朝期には伝入されていなかった可能性が高いと思われる。

そうであれば、『太平記』作者はどのようにして「書戴嵩画牛」を受容したのであろうか。次に『韻府群玉』を見てみたい²⁶。

畫牛 有以戴嵩牛與客觀之、牧童曰、鬪牛尾入兩股間、今尾掉何也、

牛を畫く 戴嵩の牛を以て客と興に之を觀る有り、牧童曰く、鬪牛の尾兩股の間に入る、今尾を掉るは何ぞ、

ここにあげたのは卷八の一節である。『東坡志林』に記載された「書戴嵩画牛」と比べると、『韻府群玉』の方がより簡明に故事をまとめていることがわかる。『太平記』の表現は『東坡志林』に載せられた故事のように全文を引用するのではなく、主旨をまとめて引用したものである。そうしたところも故事を簡略に引用する類書の性格に近いと思われる。『韻府群玉』の記述は、『太平記』の「鬪牛之尾ヲ誤テ、牧童ニ笑レタル事」の表現と対応している。

一方、注意を払うべきところは、「書戴嵩画牛」という故事は、『韻府群玉』だけではなく、宋代代のほかの類書にも見られることである。例えば、『錦繡萬花谷』卷三十三の「畫」と『古今合璧事類備要』（以下、『事類備要』と略す）前集卷五十六「技術門」の「工畫」にも載せられている。『事類備要』の「序文」には既存の類書を取り上げて、『錦繡萬花谷』の名にも言及しているので、「書戴嵩画牛」の故事もそこから受容した可能性がある。また、『韻府群玉』の序文や凡例における言及によれば、同書は宋末に成った韻書『古今韻会举要』と類書『事類備要』に直接の範を得ており²⁷、このことから考えて、「書戴嵩画牛」の故事は『事類備要』から継承したものだと思われる。

ところで、長澤規矩也氏の調査によると、日本に現存した宋元版の書物では、『事類備要』が見えず、『錦繡萬花谷』も零本しか残されていない²⁸。また、これまでの研究において、この両書がいつ日本に渡来していかに受容されたかについてはまだ明らかにされていない。一方、前に述べたように、『韻府群玉』について、日本では元元統二年梅溪書院の刊本と五山版が

残されているので、南北朝の日本において、『韻府群玉』の方が、『錦繡萬花谷』と『事類備要』より影響力が大きかったと推断できるであろう。だとすると、『太平記』の「画工闘牛之尾ヲ誤テ、牧童ニ笑レタル事」という表現は、『韻府群玉』によって受容した可能性がより高かったのではないか。

三、『太平記』における『世説新語』の故事と『韻府群玉』

また、『太平記』における「牛」をめぐる表現は、「書戴嵩画牛」だけではなく、次の巻の「喘月吳牛」の故事にも見られる。『太平記』巻二十七「師直究驕事」の一節を見てみよう。

此師直、一条今出川ニ、故兵部卿親王ノ御母、宣旨之三位殿之栖荒シ給ヒシ古御所ヲ點シテ、唐門、棟門四方ニアケ、釣殿、渡殿、泉殿、棟梁高ク造リ双テ、奇麗壯觀ヲ逞シクセリ。泉水ニハ、伊勢嶋雜賀之大石共ヲ集レハ、車輦テ軸ヲクタク、吳牛喘テ舌ヲ垂ル、樹ニハ、月中之桂、仙宗之菊、吉野之櫻、尾上之松、露霜染シ紅之、八一入之岡ノ下紅葉、西行法師力古枯葉之風ヲ詠ソメケム難波之蘆ノ一村、在原中將之露分シ、宇都之山邊之蔦カエテ、名所々々之風景ヲ、サナカラ庭ニ集メタリ、

右は高師直が故大塔宮の母宣旨之三位殿の邸を強制的に取り上げて、名所の風景を庭に造営する場面である。伊勢、雜賀の大石を運ぶ車はきしんで車軸が砕け、牛は苦しさにあえいで舌を垂らしている。傍線部「吳牛喘テ舌ヲ垂ル」について、日本古典文学大系『太平記』の頭注は『世説新語』『書言故事』、李嶠の「牛」詩の用例を引いている²⁹。後の新編日本古典

文学全集の頭注は『世説新語』に収録された故事を引いている³⁰。『世説新語』は中国南北朝の宋の劉義慶が編纂した小説集で、後漢から東晋までの代表的人物の逸話を集めたものである。この書は、『日本国見在書目録』「小説家」に記載されており、早くから日本でも受容されてきた³¹。では、『世説新語』についての記述を確認しよう³²。

滿奮、畏風、在晉武帝坐、北窓作琉璃屏、實密似疎、奮有難色、帝笑之、奮荅曰、臣猶吳牛見月而喘、

滿奮、風を畏る、晉の武帝の坐に在り、北窓に琉璃屏を作る、實は密なれども疎なるに似たり、奮難色有り、帝之を笑ふ、奮荅へて曰く、臣は猶ほ吳牛の月を見て喘ぐがごとしと、

右の通り、『世説新語』所収の話が『太平記』の原拠であることは間違いない。この故事は後の中国の類書に収録されて、『藝文類聚』『初学記』『太平御覽』にも見える。日本では平安期の文献の中にこの故事を受容したものがある。『本朝文粹』巻一「天象」に収める源英明「織月賦」には「飛鵲猶慵、喘牛何在（飛鵲猶ほ慵し、喘牛何くにか在る）」という表現がある。田中幹子氏の指摘によれば、この「喘牛何在」は『初学記』『月』の「事対」の「吳牛喘、魏鵲飛」を踏まえた表現である³³。また、『本朝文粹』巻五の大江朝綱「爲貞信公返身隨身表」には「身毛皆豎、寒似越鳥之畏霜、心魂共迷、熱於吳牛之喘月（身毛皆豎つ、寒は越鳥の霜を畏るるに似たり、心魂共に迷ふ、吳牛の月に喘ぐより熱し）」という表現がある。これらの表現をみると、日本で受容した「喘月吳牛」は、『世説新語』に記載した故事をそのまま引用するのではなく、「喘牛」「吳牛之喘月」という語句しか引

用していない。つまり、平安時代における「喘月吳牛」という表現は、『世説新語』から直接に受容したのではなく、『初学記』のような中国の類書を媒介にして受容した可能性が大きいと思われる。

また、この故事は『韻府群玉』巻八にも収録されている。

喘月吳牛 滿奮坐晉武琉璃屏、有寒色、曰臣猶吳牛見月而喘、

月に喘ぐ吳牛 滿奮、晉の武の琉璃屏に坐る、寒色有り、曰く臣は猶ほ吳牛の月を見て喘ぐがごとし、

右に示したように、『韻府群玉』は『世説新語』の故事をやや簡略にして引用する。前に述べたように、先行研究は『太平記』作者が『明文抄』をはじめとする和製の類書から深い影響を受けたと指摘したが、「喘月吳牛」の故事は『明文抄』『玉函秘抄』『管蠡抄』『世俗諺文』などのいずれの類書にも収められていない。確かに、この故事は平安時代の文献に既に見られるため、『太平記』作者には一般教養として既知のものであった可能性はある。また、この故事は中国の類書にも早い段階から収められるものでもあった。しかし、その一方で、さきに検討した「書戴嵩画牛」とこの「喘月吳牛」は『韻府群玉』の同巻に配置され、同じ「牛」という韻類に収められている。たとえ『太平記』作者がこの故事を既に知っていたとしても、『韻府群玉』に載せられた「書戴嵩画牛」を引用した時に、同巻の「喘月吳牛」を見て、既存の知識が喚起されて、巻二十七を執筆する際に「吳牛喘テ舌ヲ垂ル」の表現を作り出したのかもしれない。

四、『太平記』における蝻螂・精衛の表現と『韻府群玉』

最後に『太平記』におけるもう一か所の表現について考察したい。まず巻十「小手指原軍事」の一段落を取り上げよう。

是ヲ聞テ時ノ變ヲモ謀ラサル者ハ、穴事々シ、何程ノ事ノ有ヘキ、唐土天竺新羅高麗俘囚千嶋ノ方ヨリ寄来ルト云ハンハケニモ實シカルヘシ、我朝秋津嶋ノ中ヨリ出テ、鎌倉殿ヲ傾奉ラントセン事ハ、蝻螂車ヲ遮リ、精衛力海ヲ埋マントスルニ異ラシト欺キ相ヘリ、

新田義貞が挙兵したことに対する鎌倉の人々の反応を述べたくだりである。ここでは自分の力を知らず、強大な敵を滅ぼそうとするのが非常に難しいことを「蝻螂」と「精衛」の故事を取り上げて喩えている。『太平記』では「蝻螂」に関する表現は、巻十四「足利殿與新田殿確執事付両家奏状事」、巻十五「多々良濱合戦事」、巻十九「桃井坂東勢追奥州勢跡道々合戦事」にも現れる。その典拠は『莊子』「内篇」である⁴。一方、「精衛」については、後の巻三十四「精衛事」で詳しく叙述されているように、その典拠は『山海經』である。実は従来の類書には、「蝻螂」「精衛」の故事は既に収められている。『藝文類聚』では巻九十七鱗介部「蝻螂」に「莊子曰、螳螂怒臂以拒車轍、不知不勝任也（莊子に曰く、螳螂臂を怒らして以て車轍を拒む、任に勝へざるを知らざるなり）」があつて、また巻九十二鳥部「精衛」に「山海經曰、炎帝之女、名曰女娃、遊于東海、溺而不反、是為精衛、常取西山之木石、以填東海（山海經に曰く、赤帝の女、名けて女娃と曰ふ、東海に遊び、溺れて反らず、是精衛と為り、常に西山の木石を取り、以て

東海を填む」とあるように、異なる巻で記載されている。

しかし、『太平記』の表現は「螳螂」と「精衛」を同時にとりあげ、自分の力を知らないことに喩えている。この両者を対にして表したものに秦観「春日雜興十首」のうち、第十首があげられる³⁵⁾。

藝籍燔祖龍	斯文就淪喪	藝籍祖龍を燔き	斯の文淪喪に就く
帝矜黔首愚	諸雋出相望	帝黔首の愚を矜み	諸雋出でて相望む
楊馬操宏綱	韓柳激頽浪	楊馬宏綱を操り	韓柳頽浪を激す
建安妙謳吟	風概亦超放	建安妙に謳吟	風暨亦た超放
玉繩帶華月	艷艷青冥上	玉繩華月を帯び	艷艷たる青冥の上
奕世希末光	經緯得無妄	奕世末光を希ひ	經緯無妄を得
兒曹獨何事	詆斥幾覆醬	兒曹獨り何の事	詆斥幾んど覆醬
原心良自誣	猥欲私所向	原心良自ら誣し	猥欲私の向ふ所
螳螂拒飛轍	精衛填溟漲	螳螂飛轍を拒き	精衛溟漲を填む
咄咄徒爾爲	東海固無恙	咄咄徒に爾爲す	東海固より恙無し
鵬鸞日彫滅	黃口紛冗長	鵬鸞日に彫滅す	黃口紛として冗長
投袂睇層霄	茲懷誰與亮	袂投じて層霄を睇る	茲の懷誰と與に亮
	らかにせん		

作者の秦観は宋代の詩人で、「蘇門四学士」の一人である。この詩は彼の作品集『淮海集』巻三に収められたものである。傍線部の第九聯「螳螂拒飛轍 精衛填溟漲」の表現は『太平記』の描写と相似するところがある。ここでは「螳螂」と「精衛」を同時に用いて、徒勞という意味を表している。

しかしながら、『太平記』の先行研究では、作者が秦観を受容したという指摘はなく、また、秦観及びその作品集『淮海集』がいつ日本に受容されたか現在の段階では不明である。よって、この一聯の詩句を受容するには別

の漢籍によった可能性が大きかったであろう。

では、次に『韻府群玉』巻十六「溟漲」の項を取り上げよう。

溟漲 螳螂拒飛轍 精衛填溟漲
溟漲 螳螂飛轍を拒き 精衛溟漲を填む

右に示したように、この秦観の一聯の詩句は『韻府群玉』巻十六に収録されている。この一句は『太平記』に受容された『詩人玉屑』『苕溪漁隱叢話』などの宋代詩論詩集にも見えないものである。また、和製の類書はもちろん、前に取り上げた宋代の類書『錦繡萬花谷』や『事類備要』にも収められていないので、『太平記』の作者は『韻府群玉』を経由してこの詩を受容し、巻十を執筆するあたり、「螳螂」と「精衛」を対にして表すことを思いついた可能性があると思われる。

むすび

以上の『太平記』の表現を考察することによって、作者は『韻府群玉』から影響を受けた可能性があると考えられる。住吉氏が『韻府群玉』に対して、「類書を繰って故事を裁量し、韻書を繙いて格律を確かめる、といった手間をさえ省き、韻書、類書の効用を一挙にして両得しようという『韻府（群玉）』の新案が、こうした要求に投じて大いに流行した実情も、容易に諒解することができる」³⁶⁾と評価したように、『太平記』作者はこれを意識しながら『韻府群玉』を使っていたのではないか。また、百科全書である『韻府群玉』には日本に伝入されていなかった宋代故事や詩歌、あるいは簡略して金句化・成語化した中国故事が収められていて、これによっ

て最新の中国文学の情報を手に入れることができた。『太平記』作者はこのような類書を使って豊富な文章表現を形成できたものと思われる。今後の課題として、引き続き『太平記』における中国の類書の受容を考察したい。

- 1 遠藤光正氏「類書の伝来と軍記物語」(『日本中国学会報』第二十九号、一九七七年)。
- 2 伊藤美重子氏「類書について」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第二十四号、お茶の水女子大学、二〇〇五年)。
- 3 小島憲之氏「平安朝述作物の或る場合―「類書」の利用をめぐる―」(『人文研究』第二十一号、一九七〇年)。
- 4 村上美登志氏「中世文学の諸相とその時代」第四部「中世文学と和製類書の受容」(和泉書院、一九九六年。初出、「十訓抄と明文抄―出典攷証から見た「為長作者説」批判―」『立命館文学』第五二〇号、一九九一年、「徒然草と和製類書―もう一つの漢籍受容―」『伝承文学研究』第四十号、一九九一年)。
- 5 遠藤光正氏注1前掲論文。
- 6 芳賀幸四郎氏「中世禅林の学問および文学に関する研究」第二編第二章「大陸文学の鑑賞と研究」(日本学術振興会、一九五六年。思文閣、一九八一年再刊)。
- 7 住吉朋彦氏「中世日本漢学の基礎研究」第二章第一節「韻府群玉」版本考―原本系統―(汲古書院、二〇一二年。初出、「韻府群玉」版本考(一)、『斯道文庫論集』第三十五輯、二〇〇一年)。
- 8 住吉朋彦氏注7前掲論文。
- 9 川瀬一馬氏「五山版の研究」上巻附章附二「解説篇」(日本古書籍商協会、一九七〇年)。
- 10 柳田征司氏「玉塵」の原典『韻府群玉』について(山田忠雄氏編『国語史学の爲に』笠間書院、一九八六年。『室町時代語資料としての抄物の研究』(武蔵野書院、一九九八年)に追補再録)。
- 11 住吉朋彦氏注7前掲論文。
- 12 遠藤光正氏注1前掲論文。
- 13 以下の引用はすべて西源院本『太平記』(黒田彰氏・岡田美恵氏編『西源院本太平記』クレス出版、二〇〇五年)によるものである。
- 14 室松岩雄氏校訂『太平記鈔・太平記賢愚抄・太平記年表・太平記系図』(国学院大学出版部、一九〇八年)。

- 15 『四庫全書総目』(中華書局、一九六五年)。
- 16 孔凡礼氏「点校説明」『全宋筆記』第一編「仇池筆記」(大象出版社、二〇〇三年)。
- 17 日本古典文学大系『太平記』(二)頭注(岩波書店、一九六一年)。
- 18 新編日本古典文学全集『太平記』(三)頭注(小学館、一九九七年)。
- 19 増田欣氏「太平記の比較文学的研究」第二章「中国詩文集の撰取に関する考察」(角川書店、一九七六年)。
- 20 王松齡氏校『東坡志林』(中華書局、一九八一年)。
- 21 周先慎氏「東坡志林初探」(『北京大学學報』哲学社会科学版、一九八二年)。
- 22 周先慎氏注21前掲論文。
- 23 『四庫全書簡明目錄』(『景印文淵閣四庫全書』第六冊、臺灣商務印書館、一九八三年)。
- 24 注23前掲書。
- 25 芳賀幸四郎氏注6前掲論文。
- 26 元至正十六年(一三五六)劉氏日新堂刊本『韻府群玉』(国立国会図書館デジタルアーカイブ、請求記号：WA35-25)。
- 27 住吉朋彦氏注7前掲論文。
- 28 長澤規矩也氏『長澤規矩也著作集』第三卷「宋元版の研究」(関東現存宋元版書目)及び「関西現存宋元版書目」(未定稿)(汲古書院、一九八三年)。芳村弘道氏「本邦伝来の宋版『錦繡萬花谷』」『学林』第二十四号、一九九六年)もこの問題を触れている。
- 29 日本古典文学大系『太平記』(三)頭注(岩波書店、一九六二年)。
- 30 注18前掲書の頭注(小学館、一九九七年)。
- 31 目加田誠氏「世説新語・解題」(新釈漢文大系『世説新語』明治書院、一九七五年)。
- 32 龔斌氏『世説新語校釋』(上海古籍出版社、二〇一一年)。
- 33 田中幹子氏「鵲について―平安詩歌を中心に―」(『札幌大学女子短期大学紀要』第二十一号、一九八三年)。
- 34 新編日本古典文学全集『太平記』(二)頭注(小学館、一九九四年)。
- 35 宋刊本『淮海集』(国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号：重002-0007)。
- 36 住吉朋彦氏注7前掲論文。